

サイクリン依存性キナーゼ阻害剤を用いた女性の 外来がん化学療法における治療継続状況

金井 良記¹⁾、大熊 祐美²⁾、古川 紗衣子³⁾、石黒 貴子⁴⁾、永野 悠馬⁵⁾、
前田 守⁵⁾、長谷川 佳孝⁵⁾、月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

- 1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 前橋店
- 2)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 板橋店
- 3)(株)アインファーマシーズ アイン諏訪薬局
- 4)(株)アインファーマシーズ
- 5)(株)アインホールディングス

【目的】 当社グループが実施した過去の調査で、女性の外来がん化学療法で分子標的薬の使用が増加しており、その原因のひとつがサイクリン依存性キナーゼ阻害剤（以下、CDK4/6 阻害剤）等新規治療薬の上市であることを示した（第 30 回本会で報告）。これらは乳がんの新規治療薬であり、その傾向は特に乳がん好発時期の 30 歳以上 60 歳未満で顕著であることも示した。そこで本研究では、外来がん化学療法における CDK4/6 阻害剤の継続状況を調査し、薬局薬剤師が治療継続に貢献するための課題を検討した。

【方法】 2017 年 4 月から 2020 年 10 月に当社グループが運営する保険薬局 598 店舗に来局したアベマシクリブ処方患者 208 名を対象に、60 歳未満群 92 名と 60 歳以上群 116 名に群分けして服用継続期間を Kaplan-Meier 法およびログランク検定で比較した。また、服用期間 90 日間隔毎に、服用継続期間を目的変数、60 歳以上を説明変数とした Cox 比例ハザード分析（有意水準 0.05）を行った（アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号：AHD-119）。

【結果】 服用継続期間は、60 歳未満群（280 日、95%CI:238-378）と 60 歳以上群（280 日、157-410）に有意な差はみられなかった。グラフの形状は 60 歳未満群では右下がりの直線であったが、60 歳以上群では下に凸の曲線となった。また、Cox 比例ハザード分析では、服用期間 90 日未満において 60 歳以上の患者に離脱が増加する傾向が示されたが、それ以降では相関性はみられなかった。

【考察】 本調査から、アベマシクリブ服用時は、60 歳以上の患者が服用初期に離脱しやすい可能性が示唆された。離脱原因についてはさらなる分析が必要であるが、薬局薬剤師は服用初期の高齢患者について副作用の早期発見等に努め、治療継続に向けた積極的なサポートを実施することが重要である。

（第 31 回医療薬学会年会（2021 年 10 月、Web）にて発表、一部要約）